

意味論・認知言語学と言語教育

塩谷 英一郎

0. はじめに

近年、日本において、母語と外語の両面にわたり、言語教育の必要性・重要性が広く認識されるようになってきた。しかし、人間は、森羅万象や心象の多くを言語化（名称づけ、ならびに文表記）する志向を有する生き物ゆえに、人間の言語に関して遍く包括的に述べようとすれば、数え切れないほどの人間の認知・認識活動にわたって述べる必要がある。したがって、何を、どのように教えるかに関して、諸分野・諸表現をしらみつぶしにチェックしながら包括的にまとめあげることは、ひとかたならぬ大変な努力を要することでもあり、言語教育も、具体的な言語の教材にしても、百家争鳴の状態である。ただし、その中で、根幹となりそうなものを拾い上げて、何本かの柱を建てることは焦眉の課題でもあろう。

小論においては、言語学の近年の成果が、言語教育の哲学に果たす役割を中心に論じる。一部には、言語学は言語教育に貢献していないという誤解もある。その誤解の理由の一つとしては、言語学が間口の広い学問であるということがある。①研究者間で共通了解のとれる「科学」的学問であるという部分、②人文科学の一つの分野として心理学・教育学・情報科学などとの接点を持つ多面性、③社会学・文化史・文化論・哲学との絡みで専門家間の主義主張の激しい側面、が挙げられる。③的な側面は、言語教育への応用という点ですぐに役に立つわけではないが、①②の側面は、言語学が言語教育に貢献できる部分がたっぷりあることを示している。小論では特に②的な言語学として、認知言語学・意味論を主に取り上げながら、言語学の言語教育における役割に関して論を進める。¹

1. 言語教育の諸相

1. 1 言語活動と言語教育をめぐる今日の問題

言語活動と言語教育をめぐる今日の問題として、外語学習に言えることと、母語にも外語にも言えて、特に母語である日本語の使われ方について言われる問題とがある。

外語教育に関して言えば、流暢に使えるようになりたいのに、なかなか使えるようになれない、という問題がある。この問題は、いわゆる「普遍文法理論」では解決できないであろう。もっと現実的な解決法として、外語の仕組み・システムの要領を積み重ね学習していくことがあるが、その要領のポイントとしてどのようなことが考えられるかに関して、認知言語学は貢献することができることを後で示す。

それ以上に重要なこととして、母語にも外語にも言えて、特に母語である日本語の使われ方について言われる問題がある。とりわけ著しいのは、言語表現力の変容であろう。

ある新聞社のコマーシャル「言葉は乱暴で、言葉は残酷で、時に無力だ。しかしわれわれは言葉の力を信じる」に示されているように、言語には、人間関係や相互理解を良くする機能もあれば、悪くする機能もある。軽薄で短絡的で衝動的な表現がバラエティ番組やインターネット上などで（またこれらの影響で子供の世界、学校という社会の中でも陰湿ないじめの道具として）飛び交っている。すなわち、言語教育には、言葉の使い方についての教育も必要である。

この問題は、教育学、心理学、社会学などにより、様々な議論がなされているが、言語学や言語哲学から貢献できることとしては、「言語には情動を統制する理性的機能があり、大人の世界ではそのような表現が直情的な表現をコントロールする」「言語表現が単純化に陥ることなく、適正規模に緻密化させたり、相手を憤慨させることなく言いたいことを適切に表現するための慣用表現やその基盤となるシステムがある」ということを具体的に体系化して示すことが挙げられよう。

言語学の中でも、言語の機能・意味・用法を扱う分野は、この方面でも

貢献してきたし、今後、貢献度は増していくことを、後述する。

1. 2 言語の機能

そもそも、言語の役割とは何であるのか。昔から、言語の第1の役割は、コミュニケーション、すなわち意思伝達のため、と言われている。これに対し、聞き手を想定しない自省的な独り言や、思考の構築にも使われるのではないかという反論が時々される。

後期ヴィトゲンシュタインの独言批判や、また進化論的に考えても、意思伝達が言語の第1の目的であることには違いないが、たとえば知能が高いとされるカラスやゴリラの鳴き声と比べても、人間の言語は格段に複雑で多層構造化している。人の言語には、どの言語にも何らかの「主題—叙述」表現様式があると想定できるし、「修飾—被修飾」関係の見出せる構造もかなりの割合を占めていると思われる。文法形式に言語ごとのある程度の差異はあるものの、大元には人間共有の認知能力・認知図式の反映を想定できよう。ただし、認知言語学は、生成文法と異なり、「他の認知システムから完全に自律した普遍的な文法形式」を最初から強引に固定するようなことはしない。²

言語の役割・機能に関して、簡潔かつ包括的に述べたものとして、機能主義言語学のHallidayが挙げた言語の3機能がある。

- (1-1) 観念構成的機能
- (1-2) 対人的機能
- (1-3) テキスト構成的機能

機能主義言語学や認知言語学の台頭とともに、「文法」の根幹は、こういった機能によって支えられているということが、改めて再認識されてきている。3機能を認知言語学の文法に当てはめてみると、構文や語彙連結といった文法・語法の多くの面は言語の観念構成的機能(1-1)により形成される。ただし、人称の選択、法助動詞や態度表明の副詞をはじめ、挨拶の決まり文句や、相手に対する配慮からの表現選択は対人的機能(1-2)が大きく関連する。また、情報の流れ、論理構成、推論などを理解するには、文法といえども単文を越えて、テキスト構成的機能(1-3)まで説明の射程

に入れなければならないことになる。³

1. 3 日本語と言語教育一般の問題

外語教育の問題点のうち、先述したように、外語学習ならではの問題点と、母語運営にも見られる問題とがある。そこで、後者の問題を摘出する必要がある。

筆者の日本語母語話者としての観察からすると、日本語母語話者は、日本語のテンスやアスペクト表現を間違えることはまれであると見られる。たとえば、「～ている」は動詞によって（「走っている」のように）継続行為にもなれば（「洗濯物が乾いている」のように）結果状態にもなるが、同じ文法形式を使用しても、主語と動詞の意味などから適宜使い分けている。また、多少の個人差はあるとはいえ、格助詞（「が」「を」「に」など）と「は」などの係助詞の使用の容認度に関しても、かなりの程度、判断は一致する。観念構成機能の重要な根拠である認知能力の共通性が原因と考えられる。

「ら」抜き言葉を巡る判断などは、世代などによって異なるが、「ら」抜き言葉を使用する人の場合、「受身」「尊敬」の場合は「ら」を抜かず、「自発」「可能」の場合は「ら」を抜く、というように、意味分化に基づいて使用するという、内発的語法が共有される。

むしろ、今の日本語の乱れの中心は、対人的機能とテキスト構成的機能であろう。

昨今の日本語の乱れとしてとみに指摘されるのは、対人的機能に関するものである。典型的なのは、敬語の使用法によく見られると言われている。

また、理的に論を組み立てて話をする力が、日本の言語教育には、不足気味であるという指摘もよく受ける。日本語が英語と比べて非論理的とか言うレベルのことではなく、教育に欠け気味であること、安易に直情表現をするような場が蔓延していることなどがある。もちろん、日本語文化圏は、英語文化圏と比べると、話し手が明言しないことを聞き手が読み取ることが期待される傾向にあると言われているが、知識や価値の多様化とともに、そのような「話し手が言語化せずに場の空気を読み取る」ような

傾向は、今後、改善されていくであろう。このようなテキスト構成機能を強化するには、クリティカル・シンキングなどの訓練が必要であるということが近年広く認識されるようになってきた。⁴

様々な状況の擬似体験学習や、誤りから学ぶ姿勢があるかどうか、外語学習のみならず、母語の使用においても、より幅広い言語教育を要することであろう。

1. 4 外語の問題

外語教育に関して言えば、流暢に使えるようになりたいのに、なかなか使えるようになれない、という問題がある。特に、中学・高校と多くの人が6年間学んでいるはずの英語に関して、この問題がよく話題になる。そのため、かつて槍玉に挙げられて、近年のゆとり教育で大幅に簡略化されたのが「文法」であった。また、必修の語句も大幅に削減された。しかし、その結果に関しては、大学英語教員間では否定的な見方が多い。

もちろん、個人差はある。その原因としては、いくつか挙げることができる。①外語には、母語と違った個別外語ごとの決まり・システムがある、ということをしちんと教える、また、教わる側としては、それを素直に受け容れるという心構えがあるかどうか、の問題がある。

外語と母語の間の共通性と差異性は、普遍文法志向の生成文法による体系化では最初の「少数原理」で行き止まる。いっぽう、認知言語学的に見れば、母語習得とともに習得される文法は、認知図式と、言語文化様式体系との関連づけの積み重ねなので、共通性と差異性の両方を把握することができる。文法形式と意味との対応づけにおいて、より中核的認知と周辺的な拡張使用、意味と形式の歴史的変化、などを考慮するからである。

外語習得において、最も肝要なのは、意味づけられた構文の積み重ね習得である。⁵

1. 5 「文法」をめぐって

文を組み立てる仕組みとして「文法」がある。「文法」をこのように定義

したとしても、その守備範囲に関しては、様々な議論がなされてきた。

一般に、「文法」といえば、言いたいことを正確に伝えるための文の組み立て方や、文法的機能語の使い方といった「決まり＝共通知識」である。個別言語の「文法」は、言いたい内容と、どのような談話・コンテキスト状況から、どのような語を、どのような文型や機能語を使って組み合わせるか、を説明する（その母語話者であれば、無意識のうちに身につけるようになると言われていたが、どこまで正確に使えるかは、幼稚園児、小学生、中学生、成人で差があるし、個人差もある。たとえば、日本語母語話者の場合、「てにをは」が間違っ使われることはそれほど多くはないが、敬語くらいになると、習得できずに成人になる人から、平均より多く、オーバーなまでに敬語を使うような人もいる）。このように、ある言語の文法を身につけてその言語が使えるようになるということは、語法から文型、そして談話・コンテキストにわたる、広義の「文法」を身につけるといえる。複数の言語を学んでみれば、それぞれの言語の文法には、大枠としての類似点と、個別の数多くの差異があり、「言語を身につけてその言語の文を不自由なく発する」ようになるためには、語法・文型・談話・コンテキストの諸レベルでの数多くの経験学習を要することがわかる。10個前後の抽象原理だけでは、とても文を構成する仕組みを身につけることの十分な説明にはなりえない。母語の場合でも、母語話者の環境あつての言語獲得といえる。一般に、母語獲得もその他の言語習得も、言語学習者と言語文化環境との動的な相互作用システムとして考える必要がある。もちろん、個別の発話としては、他の母語話者が発しないようなオリジナルの文はたくさん発せられるが、その基盤として、その言語の語彙と文型（とくに動詞構文）を習得する必要があるし、習得に際して、その意味する内容に関してかなりの程度までの共通理解なしには正確に言語を習得することができない。言語は相互主体的（intersubjective）に獲得されるものと考えられることができる。⁶

認知言語学では、意味（認知図式や伝達意図を含む）とは無関係な文法規則が初めからあるという恣意的な仮説は立てない。むしろ、文法は、様々な抽象度の差こそあれ、用法が、コンテキストに左右される度合いが段々と減って定着したものと考え、それゆえ変動可能なものとする。実

際、言語の歴史書をひも解けば、世代の何代もの交替と共に変化した文法現象は実に多い。たとえば、英語のmayやmustなどは、行為に関する話者の指示的機能から、推量の度合いを表す意味にも使われるようになったし、また、推量の度合いに関しても、時代とともにずれが生じたと考えられているし、willなどは、「意思する」という本動詞から、未来などを表す助動詞として使われるようになった。意味機能に広がりのある文法的な機能語は、歴史的に用法が分化して機能が広がったものと考えられる。たとえば、英語のhaveは、時制、間接受身、使役など、様々な文法機能表現として用いられるようになったし、日本語の「れる・られる」が受身だけでなく可能、自発、尊敬などの意味でも使われる、とか、少し考えただけでも、機能に広がりを持つ文法表現形は多い。認知言語学的に研究する目的として、「どうしてこの言語ではこういう表現や言い方をするのか」という問題に関して、動機・意味づけ・認知図式という観点から多様な言語表現についての理解を深め、適正な表現を選んだり、新たな表現を考案する糧を得る、という一面もあるのである。⁷

1. 5 「語彙」をめぐって

時々、「日常英会話は中学・高校の語彙を十分につかえればいい」という論を聞くが、やはり実際には、もっと様々な語彙を理解し使用しなければ、お決まりのことくらいしか言えないであろう。

いかなる文法も、音形の意味づけから初めて、共通内容を認定したり、類似概念に拡張転用したりして形成・習得される。このような（生成文法とは全く異なった）認知言語学の文法観からしても、語法の習得の拡張こそ、文法学習の中核をなすものと考えることができる。そう考えると、文法学習と語彙学習は、相互に密接に結びつきあっている。

2. 認知言語学のパラダイム

2. 0 はじめに

第1節では、語学学習の問題点を挙げた。その中で、認知言語学の成果の果たす役割があることを随所で主張してきた。ここで、(生成文法とは全く異質な)認知言語学とはどういうものか、概説する。

2. 1 言語学の中の認知言語学

言語の科学は非常に幅広く、一研究者が枚挙するのもおこがましいほどであるが、あえて列挙しようとするれば、扱う領域としては(関連分野も含めて)、音韻論、語彙論(辞書論を含む)、文法論(語法論、構文論、統語論)、意味論、語用論、談話言語学、対照言語学(類型論を含む)、社会言語学、歴史言語学(比較言語学を含む)、心理言語学(言語獲得論や言語習得論を含む)、言語工学(言語情報処理)などが、まず挙がる。もちろん、これらは、焦点となる対象こそずれていても、正確な境界線があるというよりは、相互に刺激しあっていることが多い。

一方、方法論としては、(1-1)言語表現データの構造比較対照、(1-2)語源・歴史的变化の追究、(1-3)言語表現の意味づけの追究、(1-4)言語表現の構成法や構造解析・処理の追究、といったものが挙げられよう。概略的な言語学史でよく見られるのは、(2-1)世界各所での個別文法理論の作成、(2-2)言語の歴史を探る試み(18世紀以降盛んになった比較言語学や歴史言語学)、(2-3)上記(1-1)の例として20世紀前半に盛んになった構造主義言語学、(2-4)心的処理(または工学的情報処理)としての言語学、(2-5)コミュニケーションにおける言語表現の意味の分析(語用論など。広く考えればコミュニケーション論や社会言語学)、などが挙げられる。もちろん、これらの方法論もまた、完全に排他的というわけではない。認知言語学は、その理解者の多くが認めるように、(2-4)と(2-5)を結びつけて考えることを基本としているし、「文法化」の議論のように、(2-2)とも相互に影響を及ぼしあうようになっている。

ここでとりわけ注意しなければならないのは、(2-4)であろう。

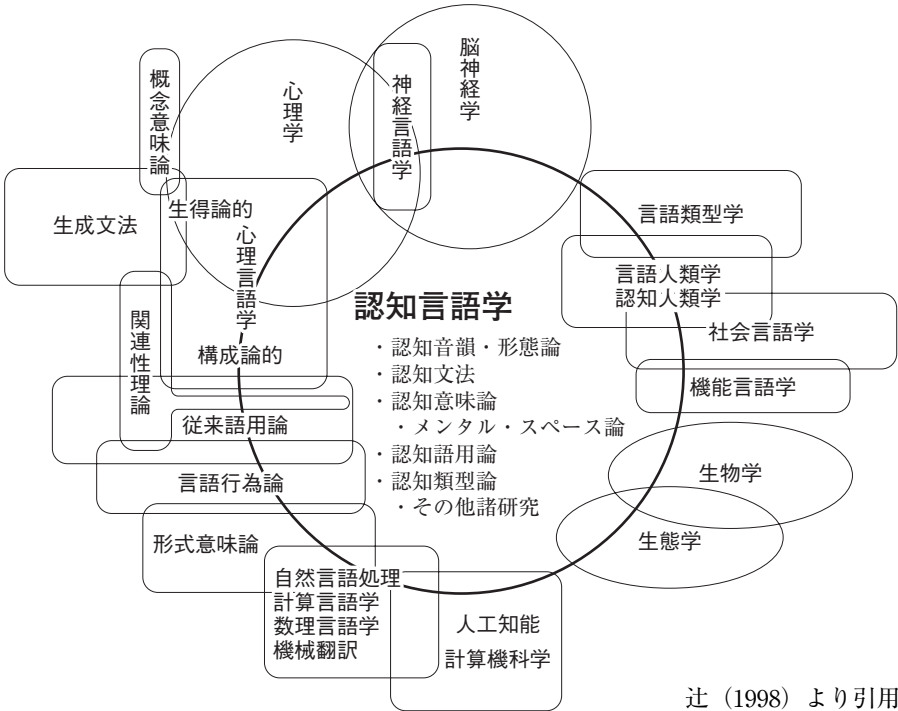
(2-4-1) 他の認知処理の影響を受けない統語処理を想定し、それを追究する
生成文法パラダイム

(2-4-2) 人間の言語習得が段階を踏んで発達することを追究する言語心理学

(2-4-3) 言語能力の発展は、他の認知能力と大いにかかわりがあり、言語表現の経験集積から言語知識（文法・構文・統語を含む）のスキーマが形成されるとする認知言語学パラダイム

(2-4-4-1) 従来の句構造文法に基づいて言語を処理する言語工学

(2-4-4-2) 「学習回路」に基づき言語処理システムを構成していく言語処理理論（コネクショニズムなど）⁸



辻 (1998) より引用

認知言語学パラダイムと生成文法パラダイムの対立の大きなポイントが(2-4-3)と(2-4-1)の違いに見られる。生成文法は一世を風靡し、今でも認知文法の考え方を否定する議論が時々見られるが、(2-4-4-1)が一定の成果を収めたことが大きいと思われる。(2-4-4-1)は、中期の生成文法理論、ならびにそこから分派した一般化句構造文法に拠るところが大きく、中期の句構造文法の分析を普遍文法理論とは考えなくなった現在のミニマリズ

ムからしても、(2-4-4-1)の成果は、(2-4-1)の現在の中心的な考え方であるミニマリストの「プラトンの問題」とは異なる話であることは、もっと強調されてしかるべきであろう。

一方、認知言語学パラダイムの科学的根拠は、(2-4-4-2)の発展とともに、一層強まっている。また、かつて、(2-4-2)の立場のピアジェと(2-4-1)のチョムスキーとの間の論争は有名であるが、問題意識の違いもあって、通約はできなかった。一方、認知言語学パラダイムは、(2-4-2)の立場の人たちが研究してきた段階的言語習得論とも整合性があり、今後、一層の交流が期待できるものと思われる。

言語学の1つの重要な研究目的の支柱としては、「言語を科学的に捉える」ことがよく言われる。しかし、「言語」を「科学する」といった時に、「言語」のどういった事象を、どのような意味・方法で「科学する」のかに関しては、分野・理論・学派によって認識が異なっている。「言語」と一言で言っても、音形があり、語彙論・形態論があり、文法（統語論・語法論など）があり、様々な意味解釈があり、また、言語習得や言語を産出する脳神経的なシステムというものも「言語科学」の研究対象として想定できるし、母語や外語の習得、あるいは言語の歴史的・社会的変化というものも「言語」の研究対象として取り組まれてきている。「科学的方法」を吟味する前に、科学的対象としての「言語」の捉え方に関して、少し考えてみる。「言語科学」というとチョムスキーの生成文法を、多くの人が今でも最初に思い浮かべている。しかし、チョムスキー派の人たちが主張しているのは、抽象的（で生得的 [?] で普遍的な）「内的言語（I言語）システム」になるのだが、その考え方を無批判に前提すべきかどうかから考える必要がある。問題点は多岐にわたるが、まずは「言語の科学的理解の手順・方法論」「言語習得の動的で様々な現実に合った理論の立て方」「現代科学論の中の位置づけ」といったことが、まず問われるべきであろう。

生成文法の理論設定を支えると思われてきた根拠の1つの大きな柱は、「各人が、教わった文に限られない文を、生後数年後には、限られた外的刺激（いわゆるチョムスキーのいう「刺激の貧困」）だけから、それとは比較にならないほど多くの文を産出できるようになる」という「観測事実」から、「(理論上は)無限の文を作り出す有限の規則の存在」そして「刺激の

「貧困」ゆえに「文を作るそれらのシステムは他の意味理解や認知機構とは異なった『生得的な装置』である」、というふうなもので、そのために「語句とは先験的に独立して、多少の経験で語順とかをパラメータ設定できるような、自存的統語システムが存在して、統語論（生成文法家にとっての「文法」）はその少数原理を解明することだ」というふうにまとめられるものであった。

2つ前の段落で示した3つの問いから、このようなチョムスキーの生成文法の検討すべき問題点を、いくつか挙げることができる。

まず、「言語を科学的対象として考えるに際しての認識の手順」と「言語習得の動的で様々な現実に合った理論の立て方」を連動するものとしてまとめて考えてみる。簡明すぎるモデルとしては、初歩のコンピュータ科学とのアナロジーで、既成の内的な文構成システムと、入力としての語彙と出力としての具体的言語表現（チョムスキーの言うE言語）という分け方は、一見、鵜呑みにされやすい。しかし、「言語習得の動的で様々な現実に合った理論の立て方」という点から生成文法の仮説の問題点を考えてみると、コンピュータが、ハードウェアの回路の設計、ソフトウェアに関しては、2値論理を出発点にして長年の数多くの様々なプログラムによって作られてきたのに対し、言語の場合、幼児が言語を習得する上で、耳に入ってくる実際の言語の中からその指示対象や中心的な意味を把握する上で、帰納法的に判断・理解する手順も必要であるし、言語表現の意味と結びつける基となる認知内容やその認知内容を形成する言語以前の認知システムも必要であろうし、言葉の指示内容を同定する上で、話者との「視点の共有」といった言葉の使い手の立場やコミュニケーションの成立の前提という要因も欠かせない。他方、内的文構成システムがあるとしても、脳内回路のどこまでが生得的か（たとえば、そもそも物事を認識することに先立って、かつ独立してシータ（意味役割）位置や格付と位置がシステムで用意されている）とか、各言語ごとに形も適用範囲も異なるような様々な構文をごく少数の原理とパラメータで機械的に産出できるのか、といった様々な疑問が生じる。チョムスキーの生成文法が、計算規則にかからないことをどんどん語彙辞書という押入れに回して、恣意的に、少数の原理を限られた英語文中心の文分析からエッセンスと思われるものを少数選び、「先験的」

システムである、と恣意的に唱えている（ラネカーは、このようなチョムスキー流の2分法を「ルール／リストの誤謬」と名づけた）が、その「原理」を理論で守るために、言語処理上、現実には起こっているとは思えないような奇妙な句構造と「移動」（あるいは痕跡指標計算）を最近の生成文法は扱っている。一方、生成文法の大前提に対する疑問から新たな考え方として登場した認知言語学では、言語習得における（幼児にとっては無意識的ではあっても）「経験とカテゴリー化処理の学習」、「認知内容と（母語などの）学習言語のパターンとの対応付け」、そして脳科学的に見ても、品詞やその配列を、先験的である必要は無く、経験処理できると考えることによって、チョムスキー流の先験的合理論も、またチョムスキーが論駁した単純経験集積論とも異なる共同主体的経験基盤構成主義（脳科学のレベルではコネクショニズム）的な考え方で、言語習得も説明できるものとする。したがって、認知言語学では、生成文法の諸原理のような、余りに恣意的な原理を無理に想定せず、文の構成に見られる、たとえば主語の中心性、影響の強さと連動する他動性や使役性の様々なパターンと文型との関連づけ、日本語の助詞も含め、様々な言語の前置詞や後置詞の個別言語ごとに用法に広がりや差のある使い分け知識の習得、認識者の態度表明としてのモダリティーなどの具体的な（学習のための経済性の点である程度まとまりをつけながらも多岐にわたる）「用法基盤文法」を文構成習得の中心に考える。生成文法家がデフォルトとして生得的原理に入れてしまいがちな例に関しても、習得の過程で一般化する上で妨げの少なかったものとすることができる。生成文法家が（還元主義が成功するという保証も無いまま）少数原理追究に「骨身を削っている」のに対し、認知言語学は、文法に反映される認識のパターンを洗い出しては個別言語ごとの拡張用法を位置付けるという具体的なアプローチをとる。したがって、認知言語学こそ、文構成を論ずる上で、中核から扱っていけるのである。このように、認知言語学は、具体的な言語の用法のダイナミックな関連づけ・体系化から言語にアプローチする。言語の使い手として「言語」という現象を意識する場合、音と（語彙・文の）意味の連関、綴りと音と意味の連関、文字通りの意味と意図された意味（文脈的解釈、コンテキストなど）、さらに学びが進めば、母語と外語の類似性と違い、言語表現の社会的・歴史的流れ、さ

らに学究が進めば、他の分野・科学の知見との関連で、言語現象に関する様々なレベルでの「何故」の問に対する、より複合的な様々な学問的仮説を想定していくことができる。たとえば、語彙論の場合、類語の比較対照から始めることもあれば、特定の語の多義の広がり方を分析する方法もあれば、形態論からアプローチすることもあれば、また、語法や、どのような文型で使われるかからアプローチする仕方もあるが、いずれにしても、今現在の代表的な語義や用法を単に羅列するだけではなく、通時的に、語彙の様々な分類に基づいての履歴と、組み合わせに伴う意味の変遷の記述をした上で、その中に見られる法則や傾向性も言語の理解の上で重要な一面になる。語用論の場合も、個別の表現に対する隠された意味のパターンを集積しながら、何らかの規則性を探っていくやり方が1つの有力な方法として考えられる。これらと同じように、文の仕組みを考えるにしても、個別言語ごとに品詞を定義づけ、語法から構文から慣用句に至るまで、ボトムアップ的にカテゴリー化するところから考えてこそ、様々な表現形式の基を広く追究できる。品詞や用法の分類の意味根拠や動機を問うてこそ、様々な文形式や「文の構成法」に関する説明を得ることができるようになる。また、「なぜ文を発するか」の大元として、「人に意思を伝える」というコミュニケーション的動機を無視することはできない。なぜ様々な助動詞を使い分けるか、といったことも、コミュニケーションを含んだ認知的アプローチによってこそ説明がつくものであり、「生得的に『助動詞句』という句構造が自律的に生成するシステムになっている」では科学的説明にならない。このように、「認知的アプローチ」は、単に一個人の認知システムの大脳生理学的な解明にとどまらず、語彙や文型の認知的な根拠、認知しやすい物事の表現からもっと複雑な認知内容の表現への用法拡張の手順、さらにその根拠として、話者の発話の意味を読み取る能力（基本的な面でも、視点の共有から始まって、発話が相手に与える作用や立場の置き換えの認識）までを視野に入れて様々な言語表現の基になる知識の体系づけを考えるやり方である。⁹

言語学の1つの難問としては、同じ表現型に対して、意味的な広がりがある、と言うことがある。表現型と意味が1対1に対応していないのだから両者は独立していると考えるのは短絡的であろう。認知図式がある表現型

を作り出し、話者の知識の広がりと共に、同じ表現型が様々な用法に拡張されて意味的な広がりができるという考え方が充分可能だからである。語彙も文法も、辞書や文法書を見れば分かるように、用法に広がりが出るほうが普通であり、「言語は認知や意味づけに基づいて用法を拡張して広がっていく」という言語観こそ自然であり、「認知的動機づけ」から文の仕組みを探る方法が有力な考え方として認められる。認知言語学がこのような「認知的動機づけ」を探る言語学であるのに対し、対立する生成文法のほうは、表現型を意味から離して抽象数学的な文構成メカニズムを探ることを目的として始まった。そのため、生成文法が「解明」しようとしてきた「統語論」は、「意味」や他の認知機構と全く独立した道具立てで文構成の仕組みを説明しようと半世紀近く苦闘を重ねてきて、まだその目的を達成できているようには見えない。¹⁰

まとめて言うと、まず、「言語を科学的対象として考えるに際しての認識の手順」としては、具体的な言語現象をきちんと説明するには、説明の基として、認知図式や意味的動機というものを中核に据えて、言語現象のカテゴリー化の収束と、用法の応用に伴う拡散を、動的・具体的に説明することが重要である。次に、「言語習得の動的で様々な現実にあった理論の立て方」という点から考えると、生得装置としては、認知内容を文という時間系列のものにまとめるための処理回路や文の中核に修飾表現を挿入したり複文を作り出したりするオートマトンのような神経回路は備わっている（チョムスキーの生成文法の最近のパラダイムであるミニマリストの目標は有り得ないような句構造を想定するような今の分析方法を根本的に改善することができるということを最低限でも必要な条件として、結局はそのシステムの算術を見いだすことにあるのかもしれない）とはいえ、具体的な文型が学習され、発展的に使用されることを説明できるのは認知言語学であって、ミニマリズム生成文法の説明可能な話ではない。

認知言語学パラダイムにおいては、恣意的な原理主義を排し、「経験基盤」、「具象からの理論抽出」、「認知内容の関連づけ」といった柔軟な信念のもと、様々な理論間の通約可能性が探られてきている（経験論的カテゴリー化論、メタファー・メトニミー論、メンタル・スペース論などを中核として、認知意味論、構文文法論、認知語用論などをcompatibleに結びつける営みがなさ

れてきた)。後々科学論的に改めて書くことになるが、このような認知言語学の考え方は、「学習する神経」という、近年の神経科学の成果とも合うことを強調しておきたい。

2. 2 認知言語学の基本思想 認知言語学マニフェスト

認知言語学の歴史を振り返ってみるたびに、画期的な年として、Langacker の *Foundations of Cognitive Grammar* と Lakoff の *Women, Fire and Dangerous Things* が世に出た1987年は欠かせない。中でも、ラネカーの *Foundations* は、生成文法とは反対の言語理論パラダイムを確立したものと多くの認知言語学者が認めていながら、邦訳が困難なこともあり、特に日本では、残念ながら、専門外の人には、認知言語学の概説書を通して以外、あまり知られていない。*Foundations* の第1巻の最初の部分に絞ってみても、膨大な論述を短いスペースにまとめるのは不可能に近いが、筆者流にいくつかをピックアップして、後半の論述に備えたい。¹¹

(3-1) 認知言語学の大前提

- (3-1-1) 言語は、語も句も文も記号、すなわち音形と意味を結びつけたものである。(文法や統語構造も、この意味で記号である、というところが、統語構造は意味から独立しているとした生成文法と異なる)
- (3-1-2) 言語は認知の産物である。それゆえ、言語の根源を認知に求める。文法も認知処理の産物と考える。
 - (3-1-2-1) 事象を認知するに当たり、「図 (figure) — 地 (ground)」分化が基本にあり、少しずつ複雑な認知フレームを形成していくものとする。
 - (3-1-2-2) 言語表現は、捉え方 (construal)、視点・パースペクティブを伴う。いかなる文でも、何を主題・主語とし、どのような述語を選ぶか、最初から選択的行為が絡んでいるといえる。
- (3-1-3) 生物は生存のために、幾多の情報をカテゴリーとしてまとめる能力を有しており、無数の現象と比べれば有限な言語表現はカテゴリー化に基づいている。
 - (3-1-3-1) カテゴリーにまとめられたものの中には、とりわけ認知しやす

いものができる、プロトタイプ効果がある。

(3-1-4) 言語表現のカテゴリー化、語彙の獲得、構文の獲得は、経験反復の強化により、定着する（いわゆる entrenchment。また、慣習性 conventionality）。複数の具体的な用法から規則が定着していく（usage-based approach）。

(3-1-5) 様々なカテゴリーは様々に関係づけられ、言語の意味関連ネットワークを遮断することは不可能である（いわゆる百科事典主義）。

(3-1-5-1) 複数の認知内容から共通項を抽出してスキーマ・カテゴリーが形成される。

(3-1-5-2) 情報内容に共通の刺激が得られる場合に、メタファー的な意味拡張が生じる。これも単語レベルにとどまらず、構文についても当てはまる。

(3-2) 認知文法の基本概念

(3-2-1) 文法は、慣習化された言語表現方法であり、その元となる多くの言語表現は認知把握の反映である。

(3-2-1-1) 名詞、動詞といった文法範疇も認知的根拠を持つ。名詞は話題の焦点、動詞は、動き・変化や関係性を記述するに際し第1に用いられる、等の考察を深めていくことが可能と考える。

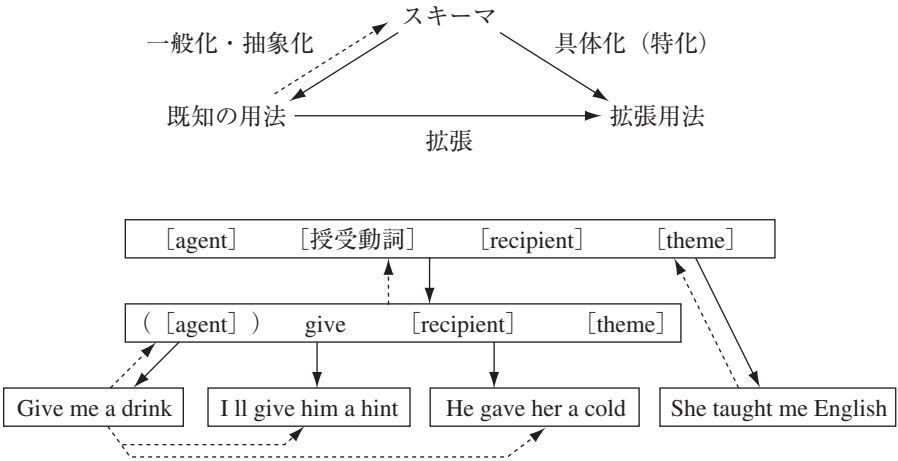
(3-2-1-2) 主語、直接目的語、間接目的語、他動詞、自動詞なども、認知の反映と考える。たとえば、「第1の図（primary figure）」が主語になることが多い。

(3-2-2) 語を超えた、句・構文・文も、語と同じく用法基盤で、認知内容との対応により動機づけられ、慣習化され、また用法拡張・転用されていく、動的な産物である。

(3-2-2-1) 抽象的な規則、一般的な規則、一般的な構文や句構造も、(3-1-4) や、(3-1-5-1) (3-1-5-2) のような経験処理を経て得られる。

(3-3) 認知言語学パラダイムを確立するに際し指摘した生成文法の誤謬

(3-3-1) 該当言語表現が規則を作っていくと考えれば、始めに先験的な文法規則ありきでそこに語を当てはめていくというチョムスキー理論はブ



塩谷 (2003) : 209より引用

ロセスの順序が逆である。また、チョムスキー理論は、具体的な語句と規則を最初から関係ないものと想定している誤りを犯している (rule/list fallacy)

(3-3-2) チョムスキーの理論では、文法的か非文法的か、をはじめ、様々なカテゴリーに関して1か0かで判断したり、あるカテゴリーに属すると他のカテゴリーに属さない、といったような排他的2分法を用いているが、自然言語を見渡してみれば、プロトタイプと周辺事例・境界事例、といったように、そのような単純な2分法では収まらない事象が多い(排他的誤謬 [exclusionary fallacy])。

2. 3 言語を成り立たせている仕組み

前節で述べてきたように、言語学、とりわけ認知科学として言語習得を論じる際に、「言語固有の生得システム」という考え方は実際の言語の習得に関してほとんど何も説明できないことを見てきた。それでは、実際に、現実に即した言語習得の科学を展開するには、どのような道具立てを想定すべきか、考えてみたい。まず、物理的基盤としては、一方に、何よりも

「言語そのもの（実際に発音されたり書かれたりしているもの）」と、それに関する様々な「文法的知識」という明確な観察事実があり、もう一方の科学的対象としては、言語を生み出す基盤としての認知科学（脳科学を含む）という理論枠が考えられる。ただし、「認知システム」は、その肝心な土俵の範囲としては、言語習得をする個人の内部システムに限定されるというよりは、同じ生物種として、しかもほぼ同じ言語を使う仲間を含む社会システムという視点も含めて考えられるべきであろう。

話を主に「文法」に関して述べる。とはいっても、一方で個別言語の文法体系、一方で、認知科学の理論的要請としての「抽象的な文法理論」の2つが別個のものとして生成文法以来考えられてきている。しかも、生成文法では後者を脳内システム（チョムスキーの用語では心的器官）として考えてきている。しかし、前節で述べたように、個別言語の文法体系を規定するものとして、「脳内文法システム」の果たす役割は、コネクショニズムの考え方を採用すれば、有ったとしても極めて小さいものと言わざるを得ない（だから、それでも「脳内文法システム」を追究するような立場の人たちはミニマリストだとも言えるかもしれない）。文法や文の構造を分析すれば、名詞類や動詞類などの品詞類があり、それらが文の中で果たす主語、述語、目的語その他の格役割があり、それらをつなげるものとしての機能語があり、またそれらに性質や（他人に意思を伝えるための）話者の様々な判断を示すものとしての修飾語（形容詞、副詞など）や助動詞などが分析できる。また、自動詞構文、他動詞構文、使役構文などが、各言語ごとに広がりその他で歴史的変遷と共に個性を見せながら様々な表現形・文法規則で作られてきた。これらの文法規則は、とくに母語の場合、無意識のうちにその言語の使い手に「身につく」ものであり、まさに様々な認知様式・認知内容が言語表現として「表出される」ものであり、したがって、こういった様々な文法事象が認知図式とどのように結びついて発展してきたかこそ、「言語習得」の主テーマでのあり、認知言語学の1つの柱でもあると考えられる。つまり、チョムスキーが提起した「言語習得の問題」は、彼が固執した少数原理的「生得システム」を追究しなくても、いくつかの文法概念ごとに「認知図式」と「用法の拡張」というダイナミズムをもって十分説明がつく。というか、認知的動機なしには、どうして「主語」

や「他動詞」や「助動詞」や「使役表現」が習得されるのかについて説明することが出来ない。

言語習得論というと、ピンカーが有名ではある。Pinker 1994の、チョムスキーと並ぶ生得説や「言語遺伝子」説は、前節で述べたように「疑似科学」的仮説に過ぎないが、彼が観測し分析した「文法の習得」に関しては、認知言語学的に捉えなおすことができることに触れない訳にはいかない。

まず、英語の過去形に関して言えば、彼は、不規則形は脳内の「語彙部門」という物置に置かれ、規則形は「生得的」統語システムで算出されると考えた。このような奇妙な二分法に関しては、コネクショニズムの研究者によってもっと自然な考え方がすでに得られている。すなわち、まず、幼児が英語を身につける上で、様々な基本動詞の個別の形がまずストックされる。次いで、-ed 形の持つ意味合いが、一般化と共に理解され、経験的に獲得したこの規則を過剰に応用した表現を発する。

次いで、人生の上で圧倒的に先輩になる母語話者との対話と共に、その干渉が十分に行われれば、決められた不規則形を使うようになる。次いで、ピンカーの研究として有名なものとして、「自動詞の他動詞化」「受動態構文」「SVOO 構文」「場所格交替構文」の習得の研究がある (Pinker 1989)。ピンカーの研究の中心としては、初めにこれらの構文の大まかな意味を最初に習得して、先の例と同じくその大枠の図式に当てはまれば、大人の正確な語法では使わないような過度の適用を幼児は一時的に発し、その後、様々な意味制約によって、発する表現が、大体、大人の使う用法にほぼ合うものに収まるというものである。統語論自律論者の中には、最初は意味制約を正確に守ることなく過度に発するのだから意味に囚われない文構成に乗ってどんどん発するのだと言う人もいたようではあるが、そのような考え方は当たらないことは、最初の(過度に一般化した)文型の習得が、大まかではあっても、言語形式と(大まかな)認知図式との対応付けによるものであることを考えれば、自明であろう。言語習得論の「現実的」なアプローチとして、トマセロの考え方を見てみたい。

人間の認識の順番として、まずは生き物の本能として、動いているまともりを認識する(「図地」分化)。その中でも、表情の変化が多く、喜怒哀楽まで分化していなくても、快-不快の直感できるもの、とりわけ養育者

を認識する。名詞、とりわけ人間を表す名詞の基盤ができる。ただし、話し掛けてくる内容や表情でどういったものが多いか、などで、早くも文化差が生じる。自分と同類のようでありながら別個の意志をもつ「他者」を認識し、次いで「他者認識」と相即して「自己」意識が芽生えるが、未熟な存在が生存していくために、人生の先達の模倣を始める（その場合、先達の振舞いを観測し、「視点の共有」を持つようになり、先達の振舞いを意味づけた上で、模倣行動を少しずつ分かる段階から習得する）。この「視点の共有」こそ、同一内容指示の理解を必要とする言語理解にとって極めて重要なワンステップといえる。一定期間の経験的な観察（と脳内回路の成長）から得られるパターン認識と運動性の向上と共に、ある段階で、自分にとって必要と感ぜられる対象物や行為の意味づけが安定し、対応物の音形を脳内の強化学習によって獲得する。そして、欲しい物や居て欲しい人の名前を発するに至る。初期の一語文もコミュニケーション的動機なしには成立しないことになるが、特定の行為、特に、「(〇〇) 取って」といった基本動詞を経験学習して、その使用が始まる。英語では take も pass も日本語では原初的には「取る」であることを考えると、普遍的な脳内言語 (generative mental lexicon) があるとは考えにくいし、原形の「取る」よりも「取って」の方を先に発する場合が多いことを考えても、「文法が生得的システムで予め存在して、その派生形を作る先験的システムがある」と考えるよりは、むしろ、用法の集積と共に文法が各人各世代ごとに形成されると考える方が現実的であろう。言語を生後2年くらいで急激に使えるようになるのは、先験的システムというよりは、認知処理の情報集積的発達というダイナミシティによるものと言えよう。¹²

スペースと時間の都合上、原初的な言語習得にもう少し触れるだけにとどめておかなければならないが、どのような品詞の語を習得するかという点でも、言語文化間に差があるようである。例えば、日本語が英語と比べて、日常会話で主語や目的語を文脈で分かる場合に大いに省略して使われるところから、また、逆に英語はそれなりの文化史的事情でそのような省略を嫌うところから、ある習得時期には、英語環境の幼児の方が習得する名詞の数が多いとか、逆に名詞を省略できる文化圏の環境では、英語文化圏よりもある時期の幼児の発話で自由に使える動詞が多いとかいった事例

も報告されている。省略表現の研究は、認知言語学が登場する前の生成文法でも研究はされてきたが、生得論的形式システムで説明されたものではなく、認知論・語用論・言語文化論的視点を導入して初めて説明がつく。さらに進めば、同じ人間の認識ということもあり、動詞で表される事態に関して、登場する名詞的「まとまり」が何らかの（場合によっては複数の）一定の関わりをするところから、様々な動詞構文が自然と身につく（トマセロは「動詞の島 (verb island) と呼んだ」)。このようにして、構文の型と、機能語の持つ意味合いが経験学習から、プロトタイプと家族的類似性でもって意味連鎖を形成するようになり、共通項が抽出される場合には、一段抽象的なスキーマを形成する。品詞の認識も共通項抽出によって認識される面があるため、品詞の意識は学童期もかなり行ってからになるし、名詞と形容動詞のように何か違いを感じつつも明確な線引きがしづらい言語現象も出てきて自然であると考えられる。

現実的な言語習得論から見てみても、「文法」は先験的に文をライセンスする抽象的なシステムではなく（「少数の大原則」と「出力（具体的表現）」という2分法は成り立たない）、「認知内容」、その共通項としての「認知図式」（先験的な基があるとすれば「認知図式」の原初的ないくつかとその自己発展的システム）と「周りの言語の先達の用法」とが相互作用して動的に多様にシステム化していく経験基盤的なものと言える。

3. 認知言語学の言語教育への活用

3. 0 はじめに

第2節で、認知言語学の考え方に関して、エッセンスとも言うべきことを概要的に述べた。第3節では、言語習得や言語教育と関係づけながら具体的に検討する。

3. 1 定型表現から創造的言語活動へのプロセス

人間は単に単語を発するだけでなく、発する文の多くは、「物事がどうな

っている」「物事がどんな性質である」「物事が何に該当する」といったことを伝えることから、語句を何らかの形でつなげて文にする。そのつなげ方は、日本語の「てにをは」や英語の7文型などのように、ある程度、認知図式を基にパターン化されている。それらは、「他動詞構文」、「使役構文」というように、伝統文法以来「構文 (construction)」と呼ばれてきた。Fillmore に始まり、Goldberg によって広く知られるようになった「構文文法」は、簡略に言えば、この「構文」こそが、文構成の基本であるという立場を取る。なお、ここでは Goldberg 流の「構文」の定義の仕方の良し悪しには触れないが、「文型」だけでなく「句形」(たとえば「AのB」、A's B)なども「構文」に含まれる。ここでは主に、動詞構文を取り上げる。¹³

構文は、認知フレームを基にして形成されるものと考えることができる。たとえば、最も簡単なところで、人が動作をしたり物が動いたりしているところから、A cat is running./John coughed./He is drinking.といった用例から英語の自動詞構文が獲得され、さらに、到達点まで認知領域に入れてプロファイルすれば、英語の場合、I'll go to school./She ran to the station.といった用例から、移動構文が得られる。ただし、到達点に向かいながらも到達という結果まで射程に入れない場合 She will leave for London. といったように、言いたい内容が異なれば前置詞も異なりうる。

人や物が別の物や人を掌握し、さらには影響を与えているところから、I got the ball./I catch you./I'll drink this coffee./Mary hit John.といった例から、他動詞構文のプロトタイプが得られる。さらに、作用の結果、移動が生じれば、他動詞形に移動先が加わって、John kicked the ball into the goal./He carried this baggage to the room. といった用例から移動使役構文が獲得され、作用から移動という結果全体までをプロファイルすることが定着して、この文型を取れる動詞が、作用を表す動詞から、移動プロセスや移動結果まで語義に含まれるような動詞用例 I take this dish to the kitchen./I moved the desk to the corner./John loaded hay into the truck.、あるいは本来は使役移動構文には使われなかった動詞の場合でも、この構文の持つフレームに該当する事態と解釈されるとき、He ran the horse over the fence.のような例にまでこの構文が拡張適用される。ただし、プロトタイプのでなくなればなくなるほど、同じ構文を適用できる言語は少なくなる。なお、Quirk文法では、

移動使役構文をSVOCと区別してSVOAとしている。¹⁴

話が前後するが、「使役」は「行為者が行為対象に働きかけて、その結果、行為対象に変化が生じる」事態と認識される。ただし、働きかけの強さとか、働きかけの直接性などによって、細分化して考えることは出来よう。また、このように、「働きかけ」と「変化」という2段構えであることから、SVOCのような文型が出てきたわけであろうが、「働きかけ」と「変化・結果」が一括してプロファイルされると、He opened the door./The terrorist killed the soldier.といったように、他動詞形になるが、He pushed the door.が作用に重点を置いているのに対し、He opened the door.は「作用+結果」という意味で「使役」を1つの動詞に含めている（語彙的使役）。それに対して、He made the door open./The terrorists caused the soldier to die.は「分析的使役」とも呼ばれるが、「働きかけ」と「変化・結果」は一括してプロファイルされていないところから、何らかの間接性を感じとることもできる。たとえば、cause to dieの方であれば、毒を撒いた日付と死んだ日付が別でも、同じ構文内に両方を盛り込むことが出来る（By spraying the poison on Saturday, the terrorist caused the soldier to die on Sunday.）が、killのような語彙使役では、そのような分化はできない。なお、たとえば日本語で、「大阪城は1583年に豊臣秀吉が建てた」というような一括圧縮する言い方が言えるが、「豊臣秀吉は1583年9月から1584年8月まで大阪城を建てていた」のように、一括圧縮が緩むと、少しずつ変な感じが出てくる（建てさせた人が大工仕事をしていただけではない）、という側面もあり、文の妥当性はプロファイルの仕方で違ってくる。

語彙的使役が他動詞構文（英語の場合SVO）の拡張用法に収まるのに対し、分析的使役のほうは、「働きかけ」と「変化・結果」が分化することにより、新たな構文を生み出す。「使役」という日本語の語感からすると、「他の人にある行為をさせる」がプロトタイプ的な感じがするのに対し、英語の causative だと、もう少し広く、「ある原因がある事態・結果を引き起こす」くらいのことを総括しているような感覚がある。実際、日本語の「させる」と英語の make 使役構文の守備範囲は、両言語の文法用語「使役」の感覚と同じくらい違っている（日本語の場合、「人間間」でない使役の場合、「原因AがBをCにする」や「原因AでBがCになる」くらいの表現のほうがよ

く使われる) が、人間は物事の因果連鎖を認識できる能力があることと、人間関係の中で人が人を動かすという行為も、人間の基本的な営みであり、それぞれにプロトタイプになりうる。「人間間の使役」も、因果連鎖の一種として認識できることから、英語のように、causativeの構文で「人間間の使役」を包含する言語もあれば、日本語のように、「使役」を表す助動詞「(さ)せる」が主に「人間間の使役」に使われるような言語もあることになる。以下、英語の「使役」構文というとき、広義の causative のことを指す。

英語の使役構文の場合、大枠としてはSVOCに当てはまるが、細かな振舞は、個別の動詞ごとに違う面も多くある。たとえば、「ある行為を起こさせる」場合、make him apologize, have him apologize, get him to apologize, let him apologize, force him to apologize, cause him to apologizeなどがあるが、強制度、直接度、抵抗度などの点で、相当な違いがある。一見して目につく to の有無も歴史的に様々な動機が絡んでいるし、一番上の主語に無生物主語が来るような用法にまで拡張されるものと、そこまでは拡張されないもの、に関しても、語ごとに歴史的な発展が異なり、習得するに際しても、非プロトタイプ的な用法に拡張されるかどうか、はコミュニケーションによって語ごとに経験的に習得される。その中から多くの動詞に適用できる型としてV N to inf.がスキーマとして抽出されるが、抽象スキーマは「形成」されるのであり、さらに、「人間間」の場合、力づくよりも言語行為による使役が多いことから、persuade、さらに結果は現実化されていなくても、働きかけということでaskといった動詞にまで転用されていく。

また、「ある原因がある対象をある状態にさせる」タイプの使役の場合、

- (4) That story made me sad. / Hard work and no play make Jack a dull boy.

というように、対象の結果状態が最後の項目に来る。もっとも、使役は、作用プロセスということで、英語は原因を主語にして、様々な行為動詞をメタファーによって転用してきた。たとえば、

- (5) This writing brought her eyes open. / The warm weather will bring the cher-

ry trees into blossom. / Such a rumor will drive him mad. / No lie will get you anywhere. / Your plot led him to that action. / We have to put the plan into practice.

このように、英語では、状態の変化は「移動表現」のメタファー的拡大転用で表すことも多い。「移動」も「状態変化」も、時空間的幅を伴って視覚などの感覚器官に入ってくる変容、という共通感覚的な知覚内容と考えることも出来るだろう。

一方で、動詞そのものは、従来プロセスを表すもので、SVO形が普通の形ではあるが、結果までを動詞構文に組み込む、という現象が英語にはある。I pushed the door open. / I painted the wall green.などのように、結果目的のある行為の場合、ひとつのまとまりとして、1つの構文にしやすい。これが英語の結果構文のプロトタイプといえる（日本語の場合、「ドアを押し開ける」「壁を緑に塗る」という風に、1つの動詞構文にまとめることは出来るが、組み込み形式は違っている）。この種の結果構文は、ふつうはSVO的なフレームで使われるプロセスを表す動詞を用いる際に、それに付随する「変化・結果」までフレームの中で強く意識されるときに、プロセス動詞と使役構文スキーマの融合という形で作られるものであり、プロセスを表す動詞は多いので、比較的生産的といえる。しかし、獲得された結果構文フレームが、動詞が自動詞的なプロセスの場合にも拡張されるという点は、英語に顕著であり、これくらい周辺的になると、「フレーム-構文」の用法拡張が、個別言語ごとにかなり違ってくる例と言える。

(6) He shouted himself hoarse. / He talked my ear off. / He cried his eyes out. / She slept herself sober.

もともと、これらの動詞は直接目的語を持たない動詞であったが、因果関係を1つのフレームに収めようとして、このような言い方も出てきたと考えられる。しかし、動詞が普通喚起するフレームが、この構文フレームの意味まで広く意識されるだけの慣習化がなされていないことと、直接目的語であるから主語の行為が直接影響を受けるものに限られ、そういった

制約が強いので、このような周遍的な用法の生産性は、今のところ高くはない。

英語のSVOCでもう一つ触れておくと、英語では、知覚動詞 see、hear や判断動詞 find、believe など、SVOCを取れるが、日本語では、使役動詞は「AがBに（を）Cさせる」、知覚動詞が「Aは、BがCするのを見る／聞く／知覚する」、判断動詞では「AはBがCと判断する／思う／分かる」「AはBをCと判断する／思う／分かる」と、全く違ってくる。日本語では助詞の意味の広がりや構文を作り出すのに対し、英語では、「掌握」がプロトタイプの直接目的語と前置詞や不定詞・動名詞を活かして構文を作る、という手段の違いと言える。このように、基本構文でも、各言語ごとにそれぞれの発展の経過があったものといえる。¹⁵

以上のように、普段なにげなくSVOCで統括している英語の構文も、動詞ごとに取れる形に様々な動機があり、同じフレームの想定できるカテゴリーごとに同じ構文を適用できるようになり、ただし、プロトタイプから遠ざかると適用も制限されてくる、という点で、構文習得も動的用法モデルに基づくものであることが分かる。

授受構文は、英語の場合、(7) のように、二つの構文を習得する。

- (7) a. John gave her a nice present.
b. John gave a nice present to her.

構文の型の成立としては、前者はゲルマン系の語順から、与格・対格の格表示の語尾が落ちて成立し、後者はロマンス系言語的な動詞句構造であるが、二つの文型を獲得した英語では、類像性という自然な認知プロセスを経て、語順が先で動詞により近いものがより焦点化される。その結果、英語の場合、SVOO形のほうが、「受け手」が影響を受けるということが前景化され、その具体的な1つの例として、「結果重視」の意味を帯びる。それと対比的に、SVOA形は、「与えられるもの」の方に焦点が当てられ、その結果、「与える活動」というプロセスが前景化される。したがって、普通、(8a) の言い方はしても (8b) の言い方はしない。

- (8) a. He gave me a flu.
b. *He gave a flu to me.

また、(9a) の言い方は無いことから、a と b とどちらかが基底構造で
もう一方が派生構造であるとは言えず、まして意味を変えない変形である
などと言う人は今はいない。

- (9) a. *John donated her all these things.
b. John donated all these things to her.

(9) のような振舞をする donate のような動詞は、ロマンス系言語由来で、
「寄贈する」のように、日本語でも漢語由来の多くは10歳過ぎくらいから学
習することもあり、幼児の構文獲得の時のような過剰生成は起こさないも
のと考えられる。ただし、同じロマンス系言語由来でも、promise のように、
幼児の生活空間で頻繁に用いられる語の場合、SVOO形が定着するのは、認
知的に考えて、自然であろう。

言語習得的に考えると、人間として、「受け取り人」に関心が行きやすい
ことから、Give me a glass of water. / John gave her a present. / She lent me a
book. / Tell me the way to the station. / I'll show you my house. といった表現を
知っていくことで、SVOO、すなわち、「N₁ (送り手) V N₂ (受け手) N₃
(伝達物)」という文型がスキーマ抽出され、授受構文の第1基本形が学習
される。日本語の場合も、同様に、具体的な文の積み重ねから、「[送り手]
が [受け手] に [伝達物] を [与える]」という構文を習得できるが、日本
語では「[送り手] が」「[受け手] に」「[伝達物] を」のうち、伝えるべき
新情報でないものは自由に省略できるということも、初期から学習される。

実は、英語の母語話者でも、基本的な認知図式-構文対応の習得と、細
かい意味規定の習得との間には時間差があることが指摘されている。ここ
では、中でも有名な、Pinker (1989) の議論を簡単に検討してみたい。同書
では、受身化、他動詞化 (自動詞 N₁ V → N₂ V N₁)、授受構文 (N₁ V N₂
to N₃ と N₁ V N₂ N₃)、移動構文 (N₁ V N₂ into/onto N₃ と N₁ V N₂ with N₃)
の4種を扱っている (なお、Nは名詞 (句)、Vは動詞を表わす)。受身の

問題にはいくつかの複雑な要因がかかり、一論文では済まないようなテーマでもあり、ここでは除き、構文との兼ね合いで、授受構文と移動構文に焦点を当てる。

認知言語学では語にせよ文型にせよ、指示内容に共通性があれば拡張することを人間の言語活動の重要な動因と考える。授受構文も、受け手だけでなく、例文 (10a, c) のように、受益者など、いくつかの拡大例を持つ。

- (10) a. Bring me all these things.
b. Bring all these things to me.
c. Bring all these things for me.

さて、ピンカーの論点であるが、幼児は、大人は言わない (11a) のような文を結構発する時期がある。

- (11) a. *Pick me up all these things.
b. Pick up all these things for me.

授受行為や、受益者を含めた拡張的用法を、認識の図式と構文の型という大まかな関係づけを子供はまず行う。大人が文法的と判断したり非文法的と判断したりする根拠はもう少し細かく、個々の動詞の意味毎にいろいろ事情があるが、概略、同じ受益者であっても、行為が受益者から見て直接性に乏しいとa型構文は使われない、と後で認識することによって、使わなくなるようである。2種類の移動構文と言語習得との関係は、次節で述べる。

抽象スキーマをどんどん図示していこうとすると、働きかけが物理的かどうか、結果が現実的かどうか、まで同時表記しなければならなくなるが、図で示す場合、作用が物理的な場合太線の矢印、心理的な場合太字の点線の矢印、とか、非現実的な場合未然空間を表記する、とか複雑になりつつも、統括的なスキーマとして普通の矢印で簡易共通スキーマを表記する試みは可能ではあろう。ただし、文の使い手から見た場合、あくまでも、具体的な動詞構文と、それが述べている事態に対応する動詞個別の意味に伴

う意味構造フレームを対応付けが言語の経験学習の最初にあり、幼児の意味理解が大雑把な中で比較的早く定着する大枠の認知フレームによる一般化が生じ、意味理解・用法理解が深まる中で、過度の一般化を修正してカテゴリーを再分化し、大体その言語共同体の言い方に合うようになりつつも、共通認識が得られるという感触があれば、同じ言語形式に新たな用法を拡張利用するようになるものと考えられる。

3. 2 「構文」の広がり

構文の広がりに関して、もう少し見ていこう。

1つ目は、メトニミーの一種であるが、焦点の当て方で文型が変わる。

移動使役構文の中には、(12)、(13)のように、2つの形を持つものがある。aは移動されるもの、そしてその移動のプロセスに焦点が当てられているのに対し、bは移動先、そして移動先に生じた結果に焦点が当てられる。

(12) a. He loaded the boxes onto the truck.

b. He loaded the truck with the boxes.

(13) a. He provides the instrument for us.

b. He provides us with the instrument.

(14) が a. しかとれないのは、pour がプロセスに焦点を当てているからなのに対して、fill が b. しかとれないのは、fill が結果に焦点を当てているからであることは、容易に見て取れよう。

(14) a. They poured the water into the bucket.

b. *They poured the bucket with the water.

(15) a. *They filled the water into the bucket.

b. They filled the bucket with the water.

当然、(14)、(15)のように、動詞の意味からして一方の形しかない動詞を大人は類別できるが、幼児は、同じ使役移動フレーム現象について語ら

れるとき、その動詞がプロセスと結果と、どちらに焦点を当てて用いられるか分からなかった場合には、非文法的な例 (14b)、(15a) を発することもあることが、Pinker によって指摘されている。簡単に認知言語学的に説明すれば、「移動一目標 (goal)」プロセスのフレームで解釈できる事態の場合、関係概念に先立って参加者がまず同定され、次いで、前置詞によって表されるもの (と目的語) のどちらが移動物でどちらが目標であるかが認定できる。その時点で、幼児は非文法的な (14b)、(15a) を発することもある、と考えられる。その後、pourと構文aはプロセスに焦点を当てる、fillと構文bは結果に焦点を当てる、ということを大人とのコミュニケーションを通じて学習すれば、非文法的な (14b)、(15a) は発しなくなる。このように、認知処理が精緻化するに従って、構文・文法の用法も適切な制約が加わる。ただし、原初段階での構文認知にしても、副次段階でのより正確な構文認知にしても、認知情報と環境で発せられる構文型との経験学習による処理であることには変わらない。

形容詞構文にも、メトニミー現象は多く見られる。たとえば、いわゆる tough構文は、どの理論でも、文法を論ずる際に、よく取り上げられる。

(16) It is difficult to work with John.

(17) John is difficult to work with.

(17) においても、Johnが「一緒に仕事をするのが難しい」対象であるという点は (16) と同じであるが、焦点の当て方が違っており、当然、意味に違いが生じる。(16) の構文は、「そうすることは難しい」という点で、「仮想事態」に関して述べる文であり、その理由は、必ずしもJohn自身の性格である必要はなく、外的な、たとえばスケジュール的な事情でもいえるのに対し、(17) の構文は、John自身の固有の理由から「一緒に仕事しにくい」人物であることを言っている (John is a difficult person to work with.とも言える)。このように、「主語の持つ焦点性」のように、文の中で目立つ位置にある表現に、より多くの焦点を当てて語っていることになる。なお、このような差は、「ジョンと一緒に仕事するのは、難しい」と「ジョンは、一緒に仕事をするのが難しい」のように、格を入れ替えても語順に差の少

ない日本語の場合、英語と比べると差が出にくいのも、統語構造の相対性のゆえ、と言えよう。

(17) の構文が (16) の構文の「生成的派生」である、と言う人は、さすがにほとんどいなくなった。むしろ、(17) の基底には、John について語る形容詞構文「John + be + 形容詞句」があり、そこに、(16) の認知図式を当てはめる上で、焦点部分だけ主語の位置に来た、ということで、歴史的経験主義で説明がつく。

2つ目として、事象を記述する際、3.1でも見たように、「移動」、「変化」、「作用」、「因果」といった図式が、移動動詞や他動詞や使役動詞などの構文を生み出すわけであるが、これらの図式が、行為動詞、発話行為動詞、思考動詞など、さまざまな人間的な営みを表す動詞構文にも転用される、ということである。そして、転用度が増せば増すほど、言語ごとに、表す内容に対応する構文に違いが出てくる、ということでもある。

たとえば、Talmyは、force dynamics (動力学モデル) を提唱した。意思を押し通そうとする行為も、物理的作用と似たようなイメージ・スキーマが想定でき、一方で、働きかけの細かな違いが文法にも反映されることを示している。ただ、注意すべきは、英語がとりわけ「他動詞表現」「使役表現」の多い言語であり、このようなモデルもどこまで言語表現に反映されるかは、個別言語ごとにいろいろと差が出る、ということである。

構文の拡張との関係で、take a walk (散歩する) のような、迂言的 (periphrastic) 表現に関しても触れておきたい。日本語でも、「歩を進める」「歩みを止める」といったように、行為を名詞化して他動詞構文などに盛り込むことは、いろいろな言語でよく見られる。行為が名詞化されることは、3.1でも触れたように、文が複雑な事態認識を語る上で事態を一括りして指示する必要性が出てきたものと考えられる。一方、行為名詞を目的語などに据えた構文の中核に出てくる動詞は、その「行為」に対する、主語の位置に来る「主体」による、コントロール・作用を表すものと考えられる。したがって、英語の例で言えば、take, make, have, give, get, putといった「一般的」な動詞が来る場合でも、どの動詞が来るかは、「歴史的に定着した用法だから」という一面があるにしても、動詞ごとに意味づけが異なっており、Dixon (2005) にも述べられているように、少しずつ意味が違っている

ことが指摘できる。

3. 3 「文」とメンタル・スペース

「文型」が認知の反映であることは、これまで見たとおりであるが、「文型」の意味は、その文の意味の重要な骨格を表すとはいえ、文の持つ意味はさらに広い。日常の普通の文で、一見、矛盾しているような文でも、自然に意味をつかめるケースは多い。

(18) In this painting, the girl with blue eyes has green eyes.

Fauconnierのメンタル・スペースは、このような文の意味解釈をするには、「肉眼の世界」と「絵の世界」という2つのメンタル・スペースを立てればよい、という話を出発点にしながらも、簡明ながら様々な応用の利くメンタル・スペース理論を展開し、近年の「融合スペース」論では、ラネカーのネットワーク・モデルに並ぶ生産的な認知処理論を展開している。¹⁶

「文の認知意味論」との関連で、3つほど、応用を紹介しよう。

最初の応用は、1つの文の意味解釈をするにも、複数のメンタル・スペースが想定できる、という話である。

(19) (今の) 首相は、30年前は大学生だった。

(20) (かつての) あのダンディーが、今やすっかり女性恐怖症だ。

(21) あのダンディー俳優が、映画の中では全くの女性恐怖症を演じている。

日常会話では、(19)の「今の」や(20)の「かつての」を省いても、主語の属性と述部の属性が矛盾気味であるにもかかわらず、普通に矛盾していない文として解釈できるのは、時間的に異なる2つのメンタル・スペースを介してまとめて解釈できるからであることは、簡単に見て取れよう。(21)は、(19)や(20)と比べると、ごく当たり前のますます矛盾を感じない表現であるが、メンタル・スペース的に言えば、「現実空間」と「仮想空間」

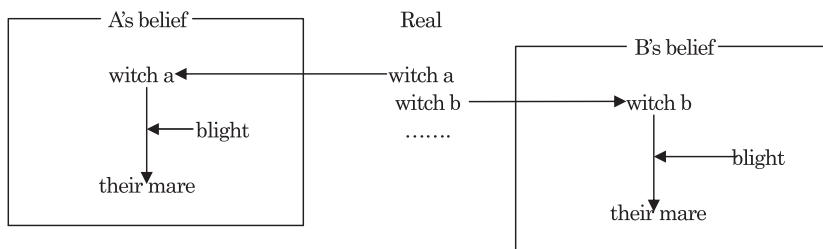
を立てている、という点で、話に広がりが出てくる。

思考動詞にともなう内容節あたりになると、「現実空間」と「思い込み空間」との照合で、複数の解釈が可能になってくる。Fauconnier (1994) の日本語訳の解説238-239ページの例を引用しながら、メンタル・スペース理論の有用性を確認してみる。

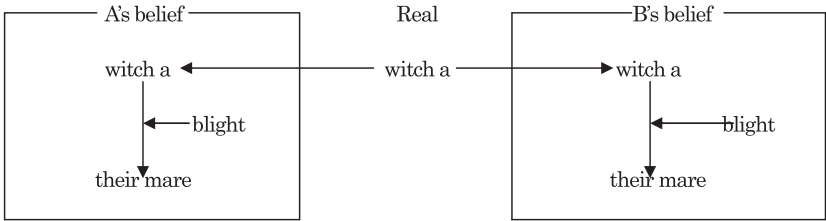
(22) Everyone believes that a witch blighted their mares.

一昔前まで、述語論理学や、生成文法のLF (logical form, 論理形式) では、この文の複数の解釈を、単線的なスコープの広さの違いという風に論じてきた。すなわち、a witch が everyone によって様々なら (変項解釈) everyone > a witch、a witch が everyone のどの人にとっても同じであれば (定項解釈) a witch > everyone、また、a witch が現実空間で特定されていれば a witch > believe、a witch が特定されていなければ believe > a witch、しかし、大主語の役割として、believe > everyone はありえない。すると、a witch が、現実空間で特定されないけれど、皆、同じ人物を考えている場合を、単線的なスコープの序列付けでは説明できないことになる。このような論理形式は、数学では大いに有用であるが、問題は、数理論理学の論理形式を自然言語に過度に一般化して当てはめたところにあり、特に、「現実空間」「信念空間」の関係と、「変項解釈」「定項解釈」の関係を単線的に扱おうとしたところに問題があったことは、容易に判る。メンタル・スペースで考えれば、もっと自然に、解釈の違いを図示できよう。

22-1 witch: variable; real (旧表記 every > witch > believe)

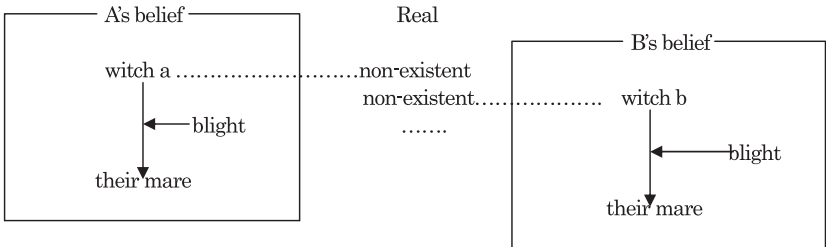


22-2 witch: same; real (旧表記 witch > every > believe)

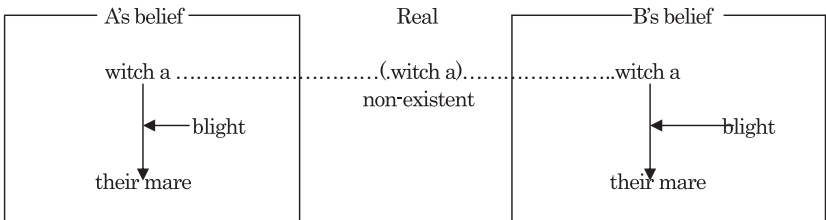


22-3 witch: variable; non-real (旧表記 every > believe > witch)

(believe > every > witch はおかしい)



22-4 witch: same; non-real (旧表記 なし believe > witch > every はおかしい)



また、ラネカーの動的用法モデルで、一般化と精緻化が重要な役割を果たしていることと並行して、メンタル・スペース理論にも、2つのスペースから、共通項を抽出する総称スペースと、2つのスペースに盛り込まれた具体的事項を1つのスペースに盛り込む和集合的な融合スペース、という概念を導入することにより、メンタル・スペース理論は、認識活動の生産

性を例示できる。たとえば、個別事例の「認知フレーム」を文にするとき、学習されてある「統語フレーム」と融合することによって、具体的な「文のフレーム」が形成される、と考えることができる。

3. 4 文法化——文法は概念の抽象化により作られる

語は、大きく分ければ、自立した意味を持ち、単独で発しても指す内容が分かる「自立語（内容語, content words）」と、文の中で特定の文法役割を果たし、文法関係の中で意味機能を果たす「付属語（機能語, function words）」の2種に分かれる（理論言語学一般では「内容語」、「機能語」、日本語文法では「自立語」、「付属語」が使われることが多い）。自立的な内容語の代表として、具象名詞、形容詞、自動詞が挙げられるし、「機能語」の代表として、助動詞や、付接機能語（日本語の助詞や中国語の介詞）、接続詞などが挙げられよう。ただし、両者の間に完全な線引きが出来るのでは必ずしもないし、後者は意味的に抽象的だといっても程度問題であって、全く意味が落ちるわけではない。たとえば、「AはBするようだ」と「AはBする模様だ」を比較した場合、現代日本語文法では、「ようだ」は助動詞、「模様だ」は名詞ないし形容動詞に分類されるだろうが、機能性・抽象度の面で、それほど違いがあるわけではない。品詞の自立性を考えて見ると、大まかなところでは、具象名詞>抽象名詞>形容詞>自動詞>他動詞>副詞>接続詞>形式名詞>補助動詞>助動詞>連語>助詞 という序列が感じられるが、個々の語の様々な使われ方で、自立度は違ってくる。たとえば、英語のhaveは、動詞的用法と助動詞的用法で自立度がかなり違うが、getは、SVCや使役のSVOCくらいになると機能語の度合いが増すものの、動詞扱いされる。しかし、抽象度・機能語の度合いという点ではかなり助動詞寄りである。「～について(の)」「～に関する／関して」「～に対する／対して」「という」といった連語は、機能語の度合いはかなり高いが、伝統的な日本語文法では助詞に入らないため付属語扱いされてこなかった。それでも、かなり自立度は低い。また、英語の助動詞canが、「できる(能力がある)」、「できる(してよい)」、「ありうる」という風に用法が広がったことから分かるように、機能語内部にも機能転用は生じうる。

「文法化」の定義の仕方は、厳密に論じれば細かい問題もいろいろあるが、簡単に言えば、元来「内容語（自立語）」であったものが「機能語（付属語）」に転用されること、と言える。たとえば、名詞「様」+助動詞「だ」が合わさって助動詞「ようだ」が成立した、とか、「意志する」という意味の本動詞willが助動詞として定着するようになった、といったことが挙げられよう。ただし、上述のように、「文法化」は程度問題の側面があると言える。自立度が増すほど、具体的事物との対応が付きやすい。機能的になればなるほど、「事物の属性」に関する意味が落ちて（いわゆる「意味の希薄化」）、状況に左右されずに機能的意味が特定化していった言葉のつながりを果たす（状況に左右されなくなるということは、物理的な意味が薄くなっていくと同時に、様々な状況下で共通する特定の意味関係を、その語が担っていくようになる、ということでもある）。たとえば、接続詞の「したがって」は、「Aに従って」といった動詞的な意味から（それも行為動詞から抽象関係を表す動詞へとひとたび抽象化されて）、状況に関係なくいくつかの陳述を結びつける接続詞へと抽象化・機能語化したものと考えることができる。¹⁷

どのような文法化が生じるか、に関しては、諸言語間に、かなりの多様性と、ある程度の類型性が見出される（Heine & Kuteva）。

テンスやアスペクトは、言語ごとに様々な文法化が見られる。日本語の場合、「ている」は、典型的には行為動詞・プロセス動詞と結びついて進行相を、「である」は完了相を表すことが多い。後者は、「モノ、（ある状態で）在る」、前者は「ヒト（など）、（あることをして）居る」というところから、認知的に広がって使われるようになったものと考えられることもできる。ヨーロッパ系言語の完了形は、英語の have のように、所有の動詞が使われることが多いが、ある状態にしたものを「所有する」→「維持する」→「影響を現在に残す」という風に、「心象」的な「維持」を表す用法も、本来の意味とは少しずつ離れていった定着するようになったものと考えられる。ただし、「維持」という行為の他動性を考えると、フランス語などのヨーロッパ大陸系の言語には、自動詞の完了形や過去形の助動詞として、be動詞に相当するものが使われていることにもそれなりの歴史的な動機づけが考えられよう。近接未来や近接過去で、go や come に相当する動詞が使われる

ということも、多くの言語に見られる。「～しに行く」は、話者の場合、これからしようということを表すのに多く用いられ、「～してきた」も、逆に、話者の場合、先ほどまでやっていたことを表すのに多く使われているうちに、近接未来や近接過去を表す文法表現として定着したものと考えられる。また、英語が「現在完了形」という文法形式のもとで様々なテンス・アスペクトに関するイメージ・スキーマを拡張させてきながら過去形と棲み分けてきたのに対し、日本語の場合、完了の助動詞「た」（「今やっと、発表が終わった」）が過去を表す「た」（「10年前は若かった」）へと転用されたのは、近接完了の認識の方が認知的に先立つとしても、認知的共通性として、直前も昔も過去である、という基盤から認識の拡張と共に「た」の用法も拡張して認識されるものと考えられることができる。さらに、中国語の「了」も英語とも日本語とも異なった広がりを持つことからしても、文法化には、認知的な共通性と共に、精緻化や用法拡張が必然的でないことが見て取れる。アスペクトは、認知的に習得するまで、いろいろな揺れがあるため、動詞の語尾や助動詞以外にも、さまざまな文法形式が応用されてきた。日本語の「～しておく」、スペイン語の *estar*（英語の *stand* に相当）、英語の *SVC* に使われる *remain, keep, get*、あるいは本動詞の後につく副詞小辞の *up* の一部の用法、など、挙げればきりが無い。

未来を表す表現ともなると、推量や意志のようなモダリティを表す表現との関連性も、多くの言語で見られる。同じ未来でも、上述の「行く」が比較的近い未来を見据えて述べるのに使われやすいのに対し、将来予測は、まさに「未来の推量」であり、確信があれば、確信を表すモダリティ表現が使われるし、弱い推測であれば弱い推測のモダリティ表現が使われやすいのは、至極当然のことといえよう。したがって、未来を表す表現は、確信の度合いが強すぎず弱すぎずといった場合に、「推量」であるという意識よりも「未来」を語るという意識がより強くなって、「未来を表す文法形式」が登場する言語が多いのも、自然であろう（なお、日本語の場合は、推量を表す文法形式は多いが、純粹に未来を表す文法形式は確立していない）。

機能語のもうひとつの大きな存在として、動詞と名詞をつなぐものがあり、英語の前置詞、日本語の助詞、中国語の介詞などがそれに該当するが、とくに、中国語の介詞は、そこで使われている漢字から歴史的な経過が見

て取りやすいが、「動詞－目的語」関係から「前置詞－名詞」の関係にフレームをメトニミックに転換したものであることが見やすい。他に、日本語の「～について」「～に向けて」や、英語のconcerningなど、動詞から動詞補語を導く機能語への転用は、様々な言語で見られよう。

格関係は、3.1で見たように、その原型は、事象の推移と働きかけや方向性などをもとにしながら、「認知格」のように、常にではないが多くの場合は大まかな関係は維持しながら、意味的な広がりを持つものと考えられる。文法機能語が別の文法機能を果たすように拡張されること自体を「文法化」と呼ぶべきかどうかは意見が分かれるが、基本的な文法関係から、より抽象的な文法関係への転用は、「文法深化」とでも呼べるもので、grammaticalization 関係の論文で扱われることもある。たとえば、属格を表す文法表現を、脱格から借りてくる言語も多い（フランス語のdeは良く知られているが、英語のofも語源的にoffと共通している）。普遍的な転用とはいいいくいが、属格で表される事柄が主幹部の名詞に対して参照点的な機能を果たすことから、視点が参照点から主幹部の名詞へと移るという抽象的なプロセスを考えると、脱格から属格への転用がいくつかの言語で起きることも、必然的ではないが自然な認知プロセスであるといえよう。

このように、抽象的な文法関係を表す上で、その文法形式が定着するには、より具体的な語から、抽象関係を表すために頻繁に使用しているうちに「文法化」が生じて転用が行われることがどの言語にもあり、しかも、その転用の仕方には、多くの言語で見られるものから個別言語固有の現象まで様々あるが、認知的に説明できると同時に、どの言語にも共通して必然的と考えられるものはほとんどない、と考えられる。「文法化」は文表現を精確にしたり豊かなものにしたりする上で欠かせないものであると同時に、各言語の類型性と個性が交差する現象であるとも言えよう。

3. 5 「文」の連鎖

認知文法の扱う範囲は、もちろん、単なる「主部－述部」の分析に留まるわけではなく、複文の分析や、談話構造・テキスト構造まで含む。そもそも、フレームが連鎖されればスクリプトが構成される。その中で、文に

まとめられるフレーム間の関係は、順接・逆接などの接続詞句によってつながれるわけであるが、中でも2つの「主―述」フレームが密接に語られる場合、複文（「西野先生が向日葵なら、私は月見草です」）や重文（「西野先生は向日葵だし、私は月見草です」）が作成される。ただし、英語の場合コロン（:）やセミコロン（;）による接続のような、中間表現もあることからわかるように、密接度の表現の仕方も、言語毎に細分化されている。

複文は、主節と従属節からなるが、従属節は、主に、副詞節（連用節など）、名詞節、連体節（関係節と形容詞節）に分けられる。

重文が典型的には2つの「文」の比較的単純な並置なのに対し、副詞節を伴う複文の場合は、典型的には、「従属節」と「主節」の間に、「背景 (background)」・「前景 (foreground)」、あるいは「前提」・「新情報」のような関係が見出されることが多いが、両者が明確に2分されるというよりは、両者の差は、程度問題であって、連続的である、ということが、認知言語学者によっていろいろ論じられている。¹⁸

たとえば、英語のwhileは従属節を導くといわれているが、後置される場合、「新情報」として、前に述べられた主節に劣らず「焦点」になっている。同じことは、分詞節が最後に来る場合にも言える。

- (22) While it is true there are many people in the world who definitely need food and shelter, there are multitudes of people who live in rural or suburbs and have plenty to eat and reasonable accommodations.
- (23) Currently, the extramural fund is 25% of the total annual funding, while 75% is earmarked to build the infrastructure at the institute.
- (24) Some attribute it to a lack of involvement of professional journalists while others point out that many Japanese tend not to express themselves.
- (25) The treaty to reduce CO2 emissions would put a strain on the economy, resulting in a decline in GDP.

名詞節を伴う複文（「あの球団のお金の出し方は尋常ではないと私は思う」、I think that he is a mad genius.）の場合も、「私が思うに、あの球団のお金の出し方は尋常ではない」やHe is a mad genius, I think.のように、「前景」・「背景」関係は、強固なものではない。こういった文を理解するうえで、堅固な「上位—下位」、「支配—被支配」の統語構造を考えるよりも、メンタル・スペースと焦点の当て方と述べ方の柔軟性の観点から考えた方が、発展性があるものと思われる。

連体節を伴う複文の場合、（制限的）関係節の場合、従属節の情報があつてこそ主節の意味が具体性を持ちうるし、内容節に至っては、先の名詞節の場合と同じく、従属節の部分の情報なしには、情報伝達として不十分になってしまうことが多い。そういう意味では、従属節が「前提情報」の機能を果たしており、従属節が表しているフレームを大きなフレームに埋め込み的に融合させて複文を構成していく、と考えることができる。このように、ある文を作るに当たり、既知の情報文を埋め込んでいく場合に、両者の関係を表す機能語が必要となるが、これくらい抽象的な機能語（日本語の「～という」、英語の that, which, where など）となると、日常の内容語を比喩的に転用する、いわゆる文法化は多くの言語で見られる。というか、このような文法標識（たとえば補文標識）は、抽象的過ぎて単独では記号化（音形と意味の結びつけ）しづらいので、情報伝達にかかわる語（日本語の「言う」や英語の指示詞など）から、言語ごとにいろいろと文法化せざるを得ない。ここまできると、個別言語ごとの歴史的経緯の差も大きいので、日本語で「～という」が使える範囲と、英語で that 節が使える範囲との間にはかなりの違いが出てくるのも当然といえる。この微妙な違いを、予め用意された先験システムのパラメータとは、とても考えにくい。

- (26) There is hard scientific evidence that global warming affects hurricanes, making them more intense in general and more frequent in the Northern Atlantic.
- (27) The rise and fall of nations is a game in which the cards are sometimes concealed, played by surprising and unexpected rules.

- (28) What is new is the way in which these foundations are themselves hands-on," not just funding others but implementing their own agendas on a global scale.
- (29) "This is a society in which it is hard to demonstrate one's individuality," said Takeuchi. "When one says something different from what many say, one feels isolated. One is also reluctant to do what others don't do."
- (30) That would result in a system where the average Japanese will have jobs demanding less work
- (31) Kuwano's manner is so abrupt that on those occasions where he has to meet clients by himself he invariably drives them away.
- (32) He tells of one case where a sibling siphoned money from his parents' bank accounts to play Internet poker.
- (33) It also continued its military buildup -- to the point where the 2007 US military budget will equal the weapons expenditures of all other countries in the world combined.

なお、英語のいわゆる非制限的關係節の場合、制限的關係節のような厳密な融合はなく、指示代名詞の生起条件も、制限的用法と比べれば、かなり自由であることも自然であろう。

接続助詞や接続詞も、認知に基づく用法の動的な変化の結果、もたらされるものも多い。ここでは、接続助詞「から」と接続詞「だから」を例に挙げる。

「AだからBだ」と言うとき、個別に見れば、「先ほど雨が降ったから、今、地面が濡れている」(原因—結果)、「今、地面が濡れているから、先ほど雨が降った」(根拠—結論)といったふうに、同じ「から」が、一見、相当違うと思われる状況で使われているように見える(この例の場合、まる

で逆のように見える)。しかし、認知的に共通するスキーマは見出される。Bを確言的に認知する上で、Aの認知を経ている、ということである。

接続詞「だから」について言うと、「Aだ」「だからBだ」が、「AだからBだ」を割ったものであることは、見やすい。その際、このような分割が、コミュニケーションな経験を経て定着したものであると考えることができる。

情報の流れとして、典型的には、英語などは主題を早く提示し、日本語は最後に結論を述べる言語だといわれるが、これも、相対的なものである。英語でも、談話の状況次第では、主題を最初に提示しないこともあるし、日本語でも、最初に主題の提示が求められることもある。ただし、日本語の場合、従属節を後ろに置いたり、目的語を動詞の後に置いたりすることはできないし、打消しの述語も最後に述べられる。そういう意味では、肝心な情報をなかなか前に持って来れない言語だともいえる。一方で、英語の多くの論述のように、早くから主張内容を提示する場合でも、結部に同じ主題を同語反復するのは芸がなく、締め方が難しいとも言える。

情報の連鎖構造のあり方について、さらなる認知的ならびに論理的研究が行われる必要がある。¹⁹

4. 結

今回は、主に、認知言語学と言語学習との間の親和性を説明することに重点を置いた。集中的 (intensive) かつ幅広い (extensive) 語学学習にとって、認知言語学的に見て何が重要であるかに関して、次の機会に大枠を提示したい。²⁰

注

¹ 認知言語学の概要に関しては、Lee (2001) が最も包括的でバランスが取れている。また、Ungerer & Schmid (1996) の第6章で、認知言語学と言語教育の関係に関して言及がなされている。日本語でも、山梨(1994, 2000, 2004)、谷口(2003)などで、概要の紹介がなされている。

² Langacker (1987, 1992), Lakoff (1987, 1999)などを参照。

³ Halliday (1989, 1994)を参照。

言語の対人機能的側面に関しては、語用論の本でシステムティックに述べられている(たとえばThomas(1995), 橋内(1999), Fairclough(2003)参照)。

⁴ 日本における語学教育の問題に関しては、松畑(2002)参照。

認知が、理性・感情とどのように関わるかに関しては、北村(2003)参照。

クリティカル・シンキングに関しては、青木(2000)、野内(2003)、Bowell(2005)などを参照のこと。

⁵ 構文の習得論に関しては、Tomasello(1997, 2000, 2003)参照のこと。

日本語と英語の対照に関しては、たとえば池上(1981, 2006)参照。

⁶ 言語習得における間主観性の重要性は、ヴィゴツキー(2002)、Tomasello(1999)、藤永(2001)などを参照。

⁷ 構文の動機づけに関する議論は、たとえば、Goldberg(1995, 2006)を参照のこと。

⁸ 言語の習得に関しては、Chomskyの生成文法のような想定をしなくても、コネクショニズムで説明可能であることが、様々に論じられている。

たとえば、Rumelhart(1977)、Elman et al.(1996)、橋田(1997)、乾(1997)、MacLeod(1999)、大嶋(2000)、櫻井(2002)、Christianssen eds.

(2001)、MacWhinney ed. (1999)などを参照。

⁹ この点から考えても、認知言語学のほうが、生成文法よりも、認知科学・認知心理学のパラダイムに忠実であることが分かる。

認知科学の考え方に関しては、都築 (2002)などを参照のこと。

認知心理学において、単純な「原理とパラメーター」を脱却して、認知処理のダイナミック・パラダイムを確立する上で大きな役割をした人の1人に、Neisserがいる。認知科学の中で、言語学者の一部だけが、Neisserのパラダイム以前の段階にあるチョムスキー・パラダイムに固執しているのは、パラダイム論的に見て、興味深い不思議な現象である。

言語と他の認知内容との類似性に関しては、たとえば Haiman (1980)のように、生成文法たけなわの時代においても、既に毅然とした指摘がなされている。

「認知の認知」の永久循環を断ち切るアイデアとしては、大森荘蔵 (1994)の「重ね描き」が参考になる。

言語習得における、経験的認知処理の必要性は、心理学者 (たとえば今井)からも多くの議論が提供されてきた。

また、失語症の問題 (山鳥 (1998)、伊藤 (2005))や、新しいところでは、第2言語習得 (たとえば大石 (2006))においても、生成文法パラダイムではなく認知言語学パラダイムの有用性が示されるようになってきている。

¹⁰ チョムスキーは約5年単位で理論を変え、説明範囲もしぼめていったが、ごく限られた生得原理を果てなく追い求めている思考は変わらない。

チョムスキー流の言語習得論には、様々な方面から疑問の声は以前から上がっている。

たとえば、チョムスキーの言語習得論の要点にある「刺激の貧困」の議論に対しては、言語心理学者の Steinberg (1993)が詳しく説得力のある反論を展開している。

言語学の周辺領域からも、様々な反論がなされてきた。たとえば、生物学者の Edelman (1992)は、認知言語学が広く知られる前から、コネクショニズムによる言語学習を提唱している。

11 Langacker (1987) にある認知言語学のマニフェスト (宣言) を、筆者なりにまとめなおしたものである。

12 Tomasello (1999, 2003) 参照。また、日本などでの研究としては、小林 (1997)、小椋 (1999, 2001) などを参照のこと。

13 詳しくは、Goldberg (1995, 2006) 参照。

14 Oは対象、Cは性質 (属性、状態など) であるが、Aは到達空間 (比喩的な意味で突入状況も含む) で、これまで入れて基本的な文型論を扱ったのはQuirk et al. (1985) の慧眼であった。この本の公刊から既に20年以上経過したのに、未だに7文型でなく5文型論が幅をきかしているのは嘆かわしい。

15 メタファー理論は認知言語学の中核の一つであるが、文法や構文論にも大きな役割を果たすことに留意されたい。

認知言語学における最近のメタファー理論の展開に関しては、Grady (1997)、Kovescses (2002)、谷口 (2003) を参照のこと。

16 メンタル・スペース論と、その後のマッピング理論の展開については、Fauconnier (1985, 1997) を参照のこと。

17 「文法化」に関しては、Heine & Kutiva (2002) などを参照のこと。

18 作文に際しての文型の選択に関しては、このような情報構造の知識が必要不可欠であることは、語用論や「談話の文法」論などで、つとに指摘されている。

19 言語の対人機能的側面に関しては、語用論の本でシステムティックに述べられている (たとえば Thomas (1995), 橋内 (1999), Fairclough (2003) 参照)。

クリティカル・シンキングに関しては、青木 (2000)、野内 (2003)、

Bowell (2005)などを参照のこと。

²⁰ 経験主義的な認知言語学と語学教育の関係に関しては、近年、急速に発達して来ている。(たとえば、上野 他 2006)

参考文献

- 青木克仁 2000 『対話のための論理学 情報社会を生きるクリティカル・シンキング』 大学教育出版
- 青木克仁 2002 『認知意味論の哲学』 大学教育出版
- Bates, E. & J.C. Goodman 1999 “On the Emergence of Grammar from the Lexicon.” B. MacWhinney ed. *The Emergence of Grammar*, Lawrence Erlbaum Associates.
- Bowell, T. & G. Kemp 2005 *Critical Thinking: A Concise Guide*. 2nd ed. Routledge.
- Chomsky, N. 1957 *Syntactic Structures*. Mouton.
- Chomsky, N. 1972 *Language and Mind*. Harcourt Brace Jovanovich. (川本茂雄 訳 1974 『言語と精神』 河出書房新社)
- Chomsky, N. 1995 *The Minimalist Program*. MIT Press.
- Christiansen, M.H. & N.Chater eds. 2001 *Connectionist Psycholinguistics*. Ablex Publishing.
- Dixon, R. M. W. 2005 *A Semantic Approach to English Grammar*. Oxford.
- Edelman, G. M. 1992 *Bright Air, Brilliant Fire: On the Matter of the Mind*. Harper. (金子隆芳訳 1995 『脳から心へ』 新曜社)
- Elman, J. L., E. A. Bates, M. H. Johnson, A. Karminoff-Smith, D. Parisi & K. Plunkett 1996 *Rethinking Innateness: A Connectionist Perspective on Development* MIT Press. (乾敏郎・今井むつみ・山下博志訳 1998 『認知発達と生得性』 共立出版)
- Fairclough, N. 2003 *Analysing Discourse*. Routledge.
- Fauconnier, G. 1985 (1994) *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*. Cambridge University Press (坂原茂他訳 1996 『メンタ

- ル・スペース』新版, 白水社)
- Fauconnier, G. 1997 *Mappings in Thought and Language* Cambridge University Press (坂原茂他訳 2000『思考と言語におけるマッピング』 岩波書店)
- 藤永保 2001 『ことばはどこで育つか』 大修館書店
- Goldberg, A. 1995 *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago Press. (川上誓作他訳 2001『構文文法論』 研究社)
- Goldberg, A.E. 2006 *Constructions at Work*. Oxford.
- Grady, J. 1997 “A Typology of Motivation for Conceptual Metaphor,” Gibbs, R.W. & G.J. Steen eds. *Metaphor in Cognitive Linguistics*. John Benjamins Publishing Company.
- Haiman, J. 1980 “The Iconicity of Grammar: Isomorphism and Motivation,” *Language* 56, 515-540.
- Halliday, M.A.K. 1989 *Language, Context, and Text: Aspects of Language in a Social-Semiotic Perspectives*. Oxford:Oxford University Press..
- Halliday, M.A.K. 1994 *An Introduction to Functional Grammar*, 2nd Edition. Edward Arnold. (山口登・笈壽夫訳 2001『機能文法概説 ハリデー理論への誘い』 くろしお出版)
- 橋田浩一 1997 「言語への情報科学的アプローチ」 『岩波講座・言語の科学 1 言語の科学入門』, 第3章, 岩波書店
- 橋内武 1999 『ディスコース 談話の織りなす世界』 くろしお出版
- Heine, B. & T. Kutiva 2002 *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge University Press.
- Hopper, P. 1998 ‘Emergent Grammar,’ Tomasello, M. ed. 1998, 155-175.
- 池上嘉彦 1981 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店
- 池上嘉彦 2006 『英語の感覚・日本語の感覚』 NHKブックス
- 今井むつみ 1997 『ことばの学習のパラドックス』 共立出版
- 今井むつみ・野島久雄 2003 『人が学ぶということ 認知学習論からの視点』 北樹出版
- 乾敏郎 1997 「文理解過程のネットワークモデル」『心理学評論』第40巻 第3号

- 伊藤克敏 2005 『ことばの習得と喪失』 勁草書房
- Johnson, M. 1987 *The Body in the Mind*. The University of Chicago Press. (菅野盾樹訳 1991 『心の中の身体』 紀伊国屋書店)
- 鹿取廣人 2003 『ことばの発達と認知の心理学』 東京大学出版会
- 北村英哉 2003 『認知と感情』 ナカニシヤ出版
- 小林春美・佐々木正人(編) 1997 『子どもたちの言語獲得』 大修館書店
- Kovecses, Z. 2002 *Metaphor*. Oxford University Press.
- Lakoff, G. 1987 *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press. (池上嘉彦他訳 1993 『認知意味論』 紀伊国屋書店)
- Lakoff, G. & M. Johnson 1980 *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press. (楠瀬淳三、下谷和幸他訳 1986 『レトリックと人生』 大修館書店)
- Lakoff, G. & M. Johnson 1999 *Philosophy in the Flesh*. Basic Books. (計見一雄訳 2004 『肉中の哲学』 哲学書房)
- Langacker, R. 1987 *Foundations of Cognitive Grammar. Vol.1 Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.
- Langacker, R. 1991 *Foundations of Cognitive Grammar. Vol.2 Descriptive Application*. Stanford University Press.
- Langacker, R. 1999 *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter
- Lee, D. 2001 *Cognitive Linguistics; An Introduction*. Oxford.
(宮浦国枝訳 2006 『実例で学ぶ認知言語学』 大修館書店)
- MacWhinney, B. ed. 1999 *The Emergence of Grammar*, Lawrence Erlbaum Associates.
- McLeod, P, P. Plunkett & E.T. Rolls 1998 *Introduction to Connectionist Modelling of Cognitive Processes*. Oxford University Press. (深谷澄男監訳 2005 『認知過程のコネクショニスト・モデル』 北樹出版)
- 松畑照一 2002 『英語教育人間学の展開』 開隆堂
- Menyuk, P & M.E. Brisk 2005 *Language Development and Education*. Palgrave Macmillan.

- 守一雄・都築誉史・楠見孝 編著 『コネクショニストモデルと心理学』北
大路書房
- Neisser, U. 1976 *Cognition and Reality*. W.H. Freeman Company. (古崎敬・村
瀬旻 訳 1978『認知の構図』サイエンス社)
- 野内良三 2003 『実践ロジカル・シンキング入門』大修館書店
- 大石晴美 2006 『脳科学からの第二言語習得論』昭和堂
- 大森荘蔵 1994 『知の構築とその呪縛』ちくま学芸文庫
- 小椋たみ子 1999 「語彙獲得の日米比較」 桐谷滋編『ことばの獲得』
ミネルヴァ書房
- 小椋たみ子 2001 「言語獲得と認知発達」 乾敏郎・安西祐一郎編『認
知言語学の新展開3 運動と言語』岩波書店
- 大嶋百合子 2000 「コネクショニズムと言語獲得メカニズムの研究方略」
今井むつみ編『心の生得性』共立出版
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik 1985 *A Comprehensive
Grammar of the English Language*. Longman.
- Rumelhart, D.E. 1977 *Introduction to Human Information Processing*. John
Wiley & Sons. (御領謙訳 1979『人間の情報処理』サイエンス社)
- 櫻井芳雄 2002 『考える細胞ニューロン』講談社
- 塩谷英一郎 2003 「認知から見た言語の構造と機能」 辻幸夫編『認知
言語学への招待』第5章 大修館書店
- Steinberg, D. D. 1993 *An Introduction to Psycholinguistics*. Longman. (竹中龍
範・山田純訳 1995『心理言語学への招待』)
- 谷口一美 2003『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』研究社
- Taylor, J.R. 2002 *Cognitive Grammar*. Oxford University Press.
- Taylor, J.R. 2003 *Linguistic Categorization. 3rd ed.* Oxford University Press.
- Thomas, J. 1995 *Meaning in Interaction*. Longman. (浅羽亮一監訳 1998『語
用論入門』研究社)
- Tomasselo, M. 1992 *First Verbs*. Cambridge University Press.
- Tomasello, M. 1997 “The Pragmatics of Word Learning”『認知科学』4-1, 59-
74. (小林春美訳 2000「語意学習のプラグマティックス」今井むつみ
編著『心の生得性』共立出版)

- Tomasello, M. 1999 *The Cultural Origin of Human Cognition*. Harvard University Press. (大堀壽夫他訳 2006 『こころと言葉の起源を探る』 勁草書房)
- Tomasello, M. 2000 “The Item-Based Nature of Children’s Early Syntactic Development.” *Trends in Cognitive Science 4*, Elsevier Science.
- Tomasello, M. 2003 *Constructing a Language: A Usage-based Theory of Language Acquisition* Harvard University Press.
- Tomasello, M. ed. 1998 *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*. Lawrence Erlbaum Associates.
- 辻幸夫 1998 「認知言語学の見取り図」 『言語』 27, 11 : 46-53.
- 都築誉史 2002 『認知科学パースペクティブ』 信山社
- 都築誉史・楠見孝 編 2005 『高次認知のコンネクションモデル』 共立出版
- 上野義和・森山智浩・福森雅史・李潤玉 2006 『英語教師のための効果的語彙指導法 認知言語学的アプローチ』 英宝社
- Ungerer, F. & H.-J. Schmid 1996 *An Introduction to Cognitive Linguistics*. Longman. (池上嘉彦他訳 1998 『認知言語学入門』 大修館書店)
- 山鳥重 1998 『ヒトはなぜことばを使えるか』 講談社現代新書
- 山梨正明 1994 『認知文法論』 ひつじ書房
- 山梨正明 2000 『認知言語学原理』 くろしお出版
- 山梨正明 2001 「言語科学の身体論的展開」 辻幸夫編『ことばの認知科学事典』 大修館書店
- 山梨正明 2004 『ことばの認知空間』 開拓社
- ヴィゴツキー (柴田義松監訳) 2002 『新児童心理学講義』 新読書社